

第 16 回 日本がん生殖学会 学術集会

P- 10

奈良,2026.2.21-2.22

当院における妊孕性温存治療後の妊娠・出産について

脇川 晃子、市川 麻祐子、松崎 聖子、道端 肇、寺脇 奈緒子、森本 篤、小宮 慎之介、浅井 淑子、井上 朋子、森本 義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】AYA 世代のがんサバイバーの予後が改善したことにより、がん治療後に妊娠を希望する患者が今後増加することが予想される。当院におけるがん治療後の凍結胚、凍結配偶子の利用状況に関して報告する。

【方法】2015 年 9 月から 2025 年 8 月までの間に当院で妊孕性温存治療を行い、がん治療後妊娠許可を得て、生殖医療を行った患者の転帰について後方視的に検討した。

【結果】期間中に当院で胚凍結を実施したのは 72 名、卵子凍結は 130 名、精子凍結は 179 名であった。死亡など何らかの理由で廃棄した症例を除外し、がん治療後生殖医療を行った患者は胚凍結で 65 名中 30 名(46.2%)、卵子凍結は 116 名中 6 名(5.2%)、精子凍結は 127 名中 12 名(9.4%)であった。胚凍結 30 名の初診時年齢は 35.6 ± 3.3 歳であり、初診から胚移植までの期間は 2.9 ± 1.4 年であった。現在 3 名は治療中、残り 27 名中 20 名が妊娠し(74.1%)、17 名が出産した(63.0%)。卵子凍結 6 名の初診時年齢は 35.5 ± 3.0 歳、移植可能胚を獲得できたのは 5 名で、初診から胚移植までの期間は 4.3 ± 1.6 年であった。胚移植した 5 名全員が妊娠され(100%)、2 名は流産、3 名は出産した(60.0%)。精子凍結 12 名の初診時年齢は 36.8 ± 8.3 歳、初診時からの期間は 2.1 ± 1.5 年であった。10 名は胚移植で妊娠し(83.3%)、9 名は出産した(75.0%)。

【考察】胚凍結の利用率は 46.2%と約半数であったのに対し、卵子凍結、精子凍結は 5.2%、9.4%といずれも低い利用率であり、引き続き長期間にわたるフォローが必要である。また、胚凍結で 63.0%、卵子凍結で 60.0%、精子凍結で 75.0%の症例が生児を獲得できた。がん治療前の限られた時間で妊孕性温存治療を行うことにより、がん治療後に高い妊娠率が期待できると考える。